

為末 大

元陸上選手
一般社団法人アスリートソサエティ代表理事



「与えすぎて奪わぬように」が
我が家子育てのルールです

のは、好奇心さえあれば、だいたい大丈夫かなと思っていますので」
為末さんに似ているという息子さんは、読み聞かせも、本も好きだそうです。最近気に入っているのは、『アンダーアース・アンダーウォーター』（徳間書店）というポーランドの絵本。ふだん見ることのない地面の中の世界、水の中の世界が紹介され、そこから「なぜ海の水は塩辛いのか?」といふ問い合わせを聞く、まさに真実を探求していく作品です。

「うちちはひとりっ子なのでとくにそろかかもしれません、育児全般においても手伝いや外遊びにおける子供との距離感についても、こんな説得力のある考えを持つています。

「うちにはもちろん、子供の読書についても手伝いや外遊びにおける子供との距離感についても、こんな説得力のある考えを持つています。

子供の好奇心を喚起する体験を

ご自身はもちろん、子供の読書についても手伝いや外遊びにおける子供との距離感についても、こんな説得力のある考えを持つています。

「うちにはもちろん、育児全般においても手伝いや外遊びにおける子供との距離感についても、こんな説得力のある考えを持つています。

Profile
たぬえ・だい／'78年広島県出身。男子400メートルハーフ日本記録保持者。シドニーから3度連続で五輪に出場。現在は人間理解のためのプラットフォーム為末大学の学長、アジアのアスリートを育成・支援する一般社団法人アスリートソサエティの代表理事を務める。

為末さんのおすすめ本

親子で育てることば力と思考力

今井むつみ[著]
(筑摩書房/本体1300円+税)



ただ単語を暗記するのではなく、「意味」を自分で考えることで子供の「ことば力」が育まれる、その仕組みや実践方法を紹介。学術書のような内容がわかりやすく解説されているので、親子と一緒に家庭で取り組める。

子供時代の体験というのは、親の価値観の押し付けではなく、子供自身の自発的な好奇心を喚起できることが大切なのだと思います。

その意味では、未知の体験の連続とともにえるお手伝いや外遊びというのは、子供の成長にとって、とても重要な機会。はじめから親が答えを与えるのではなく、子供が手探りしながら、子供なりの『正解』にたどり着けるよう、見守っていただきたいですね」

3度のオリンピック出場経験を持つ、男子400メートルハードルの日本記録保持者。2012年に現役を引退してからは、さまざまなメディアを通じて自身の考え方を発信し、その発言力で注目を集め続けている為末大さん。常に自身を見つめて思索する姿から、「走る哲学者」と呼ばれている為末さんの論理的な思考と豊富な語彙の背景にあるのは「読書」でした。

「幼い頃は典型的な『やんちゃな子』だったと思いますが、母親いわく、人の気持ちに敏感なところがあつたそうです。たしかに国語の教科書が好きでしたから、人の気持ちが描写されるものに興味があつたのでしょう」

小学2年生から始めた陸上でめきめきと頭角を現し、中学生になるとジュニアオリンピックへ出場。日本中学記録更新と、早くからアスリートとして

華々しい記録を打ち立てていきます。「10代の頃は陸上漬けでしたね。しっかり本を読むようになったのは22～23歳ぐらいからでしょう。そこからけつこう本を読むようになりましたが、子供の頃から絵本は家にたくさんありました。読み聞かせもしてもらつていて、たので、本好きの素地はできていたよう思います」

中でも為末さんが思い出深いと語るのは、『おおきなきがほしい』（偕成社）という絵本。50年近く前に誕生し、いまなお読み継がれる名作です。

「自分の家庭に大きな木がほしいと主人公の男の子が空想する話なのですが、その世界に引き込まれていく感覺が好きでした。

それともうひとつ、私にとつて読書の魅力は『どうしてそういうことにが好きだ』がキーワードだといいます。それともうひとつ、私にとつて読書の魅力は『どうしてそういうことにが好きだ』がキーワードだといいます。」

そこで家庭では、5歳になる息子さんの「読み聞かせ」を担当しているそうですが、本選びも、この「なぜ」「どうして」がキーワードだといいます。

「基本的に本人が面白がりそうなものを選んでいますが、教訓的な本よりは『なんで?』『どうなつちやうの?』というものを選んでいます。人生といふことで『なぜ戦争が起きたんだろ』『どうして原爆を落とさなければいけなかつたんだろう』と考えるようになつたんです。何事も、自分の言葉で考える」という習慣は、こうした経験から培われたものかもしれません」

そこで『なぜ戦争が起きたんだろう』『どうして原爆を落とさなければいけなかつたんだろう』と考えるようになつたんです。何事も、自分の言葉で考える」という習慣は、こうした経験から培われたものかもしれません」